

①

# 自己紹介 ～2つの会社の経営者です～

(1)株式会社ふくしねっと工房 — 排除された人たちを支える福祉実践

## 株式会社ふくしねっと工房

千葉県船橋市／2006年設立／従業員 約150名／事業所 約40

全国の入所施設等でも受け入れが難しい、強度行動障害・重度知的障害のある方を中心に受け入れ。

重度訪問介護・グループホームで多数の方を支えている。

「施設からグループホームへ」の典型例はむしろ少ない。  
施設や地域から排除・拒否された人々を多く受け入れてきた。

強度行動障害・障害支援区分5～6の方でも、生活介護で工賃4～5万円を手に入れている人が多い。

## KEY MESSAGE

誰だって、  
社会の中で  
価値を持つ。

## 実践のポイント

- 重度の方の 地域での一人暮らし支援
- 仕事・役割・社会参加を組み合わせた生活設計
- 「自立とは、依存先を増やすこと」を軸に据える

②

## 自己紹介 ～2つの会社の経営者です～

(2)株式会社あんど — 住宅確保要配慮者への居住支援

### 株式会社あんど(居住支援法人)

平成29年(2017年)設立/千葉県指定居住支援法人 0003号

住宅確保要配慮者に対する居住支援を全国で展開。

高齢者/障害者/低額所得者

刑余者/虐待・DV被害者/被災者 ほか

「人生丸ごと、トータルで伴走する支援」

入居支援/家賃債務保証/身元保証

生活支援/24時間365日の見守り・緊急対応

死後事務委任/残置物処理/金銭管理委任 ほか

共同経営の体制

西澤(不動産)×  
友野(福祉)の  
二人代表制

全国での研修活動

全国居住支援法人協議会の研修委員として、  
全国で研修会を企画・運営。

◇ 居住支援法人とは

住宅セーフティネット法に基づき、都道府県から指定された法人。  
家賃債務保証・住宅情報の提供・見守り等の生活支援を担う。

## ③ 「施設から地域移行」をめぐって、日々感じていること

### 視点① 構想と現場のギャップ

構想は マクロからミクロを見がち。

しかし現場は、目の前のひとりから始まり、  
結果としてミクロからマクロに到達する。

現場には「障害者」という抽象名詞の人はいない。  
そこにいるのは、固有名を持つ一人の人生である。

### 視点② 「地域移行」という言葉

「地域移行」は、どの基準・どの選別・どの概念で語られているのか。

何が「地域」で、何が「地域でない」のか。

都市／山間部、大規模／小規模といった  
単純な図式では捉えきれないものがある。

### 視点③ もし「施設からグループホーム」を“地域移行”と呼ぶならば

両者の決定的な違いを、私たちは説明できるのだろうか。

実態として、「小規模な入所施設のようなグループホーム」が増えている現状をどう見るか。

—— 概念ではなく、暮らしの実態から考えたい。

本日は、4つの事例から「地域での暮らし」とは何かを考えたい。

4

## 私の考える「地域での暮らし」

### 施設と地域の決定的な違いとは

「支援する側／される側」の対立構造が、**固定されているかどうか。**

### 地域福祉の支援とは

対立構造がない「支え、支えられる関係」のなかで暮らすこと。  
それと、**職業としての支援を、同時に成り立たせる営みである。**

日常の介助・介護・医療・環境配慮は **手段** であって、  
それ自体が目的ではない。

### 「望む暮らし」の順序

まず **やりたいこと・社会的役割の実現** がある。  
そのための「暮らし」が **出撃の拠点** として整えられる。

「買い物や食事ができれば社会参加」——  
そう矮小化していないか。  
そこに **見えにくい差別** が潜んでいないか。

その人が、必要な一人として、社会の中で暮らし続けられるか —— それを模索し続けること。

## ⑤ 事例1 | 雄一さん — 「働く」ことが、目標の実現につながった

大阪 → 船橋市へ移住。重度訪問介護を活用した単身生活へ。

### 背景 | 行き場を失いかけた経過

重度知的障害・強度行動障害(言葉は単語程度)。

行動上の困難により、大阪では受け入れ可能な支援者がほとんどいなくなった。

「うちの子を受け入れてくれる施設がない」——母から株式会社あんどへ電話。

その電話で即答 —— 「分かった。じゃあ船橋市で暮らそうよ。」

### 支援設計 | 単身生活 + 重度訪問介護

船橋市内の一軒家でひとり暮らしを開始(9月～)。

4法人 26名の「雄一さん支援チーム」を編成。

単身生活 + 重度訪問介護 + 行動援護 + 生活介護を組み合わせる。

協力不動産業者の存在が決定的だった。

### 決定的な転換点 | モチベーション設計の組み替え

Before | 「暴れれば、ディズニーランドに行ける」

After | 「暴れずに働けば、その工賃でいつでもディズニーランドに行ける」

その後 —— 噛んでしまった支援者たちとの仲直りが実現 / 絵の才能を活かしたクッキー販売(画伯×職人) / 大阪での絵画展開催 / 千葉市美術館カフェのデザイン採用。  
「働く」ことと「目標の実現」を結びつけたことが、本人の役割・才能・社会参加を大きく広げた。



## 事例2 | みささん —「わたしのことを、わたし抜きできめないで」

強度行動障害・重度知的障害。今は船橋市の3LDKマンションで一人暮らし。

経過 | 行き場を失った状況から、地域での暮らしへ

人に噛みつく、洋服を破ってトイレに流し施設を水浸しに —— 町に居場所を失う。

「言葉は単語ふたつくらい」と思われていたが、実は 文字で気持ちを伝えられることが分かった。

船橋市へ移住。重度訪問介護を利用した一人暮らしへ。

地域のイベントでフラダンスを披露／カフェでラテアート体験。

料理が好き。お弁当を自分で作っている。

### 意味するもの

本人の 意思決定支援・安心できる関係・孤立からの回復。  
できることを先回りして奪わない —— ここに「地域」の本質がある。

### みささん本人による手紙(書き起こし)

#### —— 移居前 ——

みさのこと みさぬきで きめたくないです。  
みさのこと みさに だれもきいてくれずに  
どンドンきめられるのが すごくいやでした。

#### —— 移住後 ——

みさがこまるときには たいせつにかんがえて  
くれるひとがいてくれるってことをして  
あたしは とても あんしんしました。  
みさは ずっと ひとりぼっちでした。

※ 本人がパソコンで書いた文章を書き起こし



## 事例3 | 母子分離は「目的」ではなく「手段」

船橋市のグループホームでの生活と、その後の歩み。

経過 | 出会いから現在まで

### STEP 1 | 出会い

施設を追い出され、家庭内では本人の暴力に怯える日々。  
食々物を与えて暴力を鎮める生活の末、**体重は180kg**に。

### STEP 2 | 母子分離

船橋市のグループホームへ移行。  
生活介護で作業に就き、すぐに**作業リーダー**に。  
入院後の退院と同時に船橋へ。

### STEP 3 | 目標の設定

**「80kgになったら、船橋にお母さんをお呼んでご馳走しよう」**  
この約束のために、仕事と自己トレーニングに励む日々。

### STEP 4 | 再会

**100kg減量**を達成し、お母さんとの食事の日へ。  
工賃をすべてこの日のために貯めていた。

その後 | 危機 → 懸命なりハビリ → 奇跡的な回復、そして家族の絆の再構築

車から降りようとして転倒、頸椎を強打。一時は**一生寝たきり**と宣告される。  
本人の懸命なりハビリと支援者の毎日の交替訪問。離れていた父親も駆けつけ、(元)夫婦そろって息子を支える。  
医師の言葉 — 「奇跡が起きたとしか思えない、なんという生命力だ。」退院後、お父さんとお母さんと焼き肉へ。

### この親子から学んだこと

母子分離は**離れることが目的ではない**。お互いを最も大切にできる距離を探す — そのお手伝いである。

8

## 事例4 | 「余命宣告」からの、奇跡の親子再会

娘は船橋市のグループホームへ。母親は浦安市のグループホームの世話人として。

### 出会いの時の状況

母子ふたりの暮らし。

娘は **強度行動障害・重度知的障害**(発語なし)。  
通える場所がなく、家で母親に暴力を続けていた。

その母親が **乳がんステージIV**、余命宣告。  
元旦那の町に住み、地域から孤立。

会って5分で決断 ——

**「一緒に船橋においでよ。  
お母さんが倒れたら、  
娘さん、誰にも助けを呼べないよ。」**

### 役割を持って暮らす —— 親子別々に

#### 娘さん

船橋市のグループホームで暮らし、  
生活介護で **工賃4万円** を手にする。

#### お母さん

浦安市のグループホームで **世話人(パート)**。  
「死ぬ気でいたから貯金を切り崩せばと  
思っていた。でも、もっと働かなきゃ。」

ふたりともよく働いた。  
余命1年と言われていたが、  
**2年目、3年目と暮らしは続いた。**

親子は別々の町で、それぞれが安定した日々を取り戻した。

### 4年後 | 転移、そして最後の時間

4年後、転移が見つかる。  
お母さんは娘に信頼できる後見人をつけた。  
週末は **娘との暮らし** が始まった。  
娘の好きな食べ物を毎週用意。  
それだけが楽しみな日々。

#### お母さんから聞いた、最後の言葉

「あー、なんて  
わたしは **幸せ!**」

#### その後の娘さん

娘さんは、告別式に参列し、  
支援者とともに **しっかりとお礼** をしていた。

役割と仲間ができたこと、  
家族との **適切な距離** をつくれたことが、  
親子それぞれの安定につながった。

# ⑨ まとめ

実践から見えてきた、地域での暮らしを支えるための要点。

01

高度なスキルや資格が、  
第一なのではない。

手法や技術にとらわれすぎず、  
その人の物語のなかで、  
支援者自身が **自分の役割** を定める。

02

最後まで、その人の  
可能性・役割・価値を  
あきらめない。

「働く」「役割」「仲間」「目標の実現」  
—— それぞれを暮らしの中で結びつける  
。

03

言葉よりも、  
その場の「空気感」。

本人がいない場所で、本人のことを  
どう話しているか —— それは伝わっている  
。  
言葉でない形で、「ここにいてね」「ありがとう」  
と思えること。

04

本人の意思決定を、  
関係のなかで支える。

「わたしのことを、わたし抜きできめないで」  
—— この一言を、すべての支援の土台に据  
える。

支援観の核として

「出会わなければよかった出会いなど、ない。」

検討会への提起 | 障害者支援施設の役割

「生活の場の提供」にとどまらず —— その人の人生が、社会とつながり続けるための土台づくり として捉え直す。